



ACT

Art. Culture. Tradition

47

[発行] 札幌市教育文化会館
アクト第47号

JULY 2024

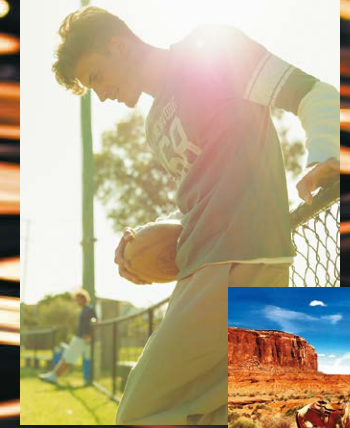
映像作家

馬場鏡丞

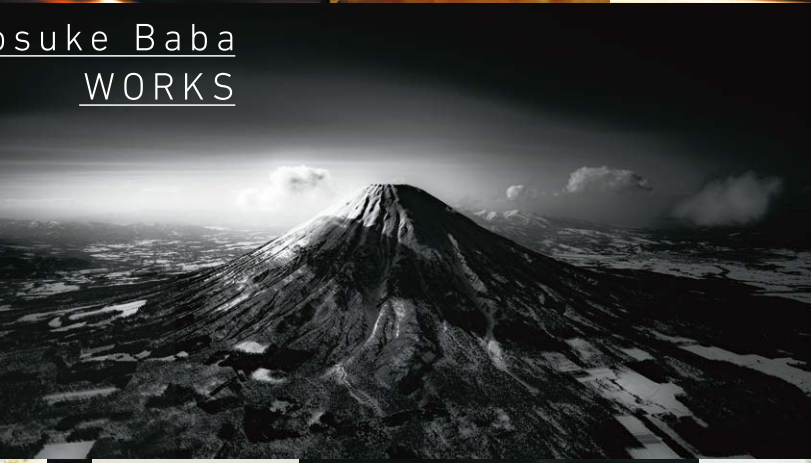
映像作家 馬場鏡丞

テレビ、インターネット、スマートフォンの画面、町中のサイネージ…見かけない日はないくらい世の中には映像が溢れています。洪水のように流れてくる映像は、それぞれ注目を浴びようと様々な表現方法を使って我々の目や耳に飛び込んできます。そんな映像を作っている人は果たしてどんな観点で映像を作っているのでしょうか。札幌を拠点としながらも生み出した作品が多くの人の心を掴み、海外のクライアントとも数多く仕事をする馬場鏡丞さんの活動から映像作家の思考を紐解きます。

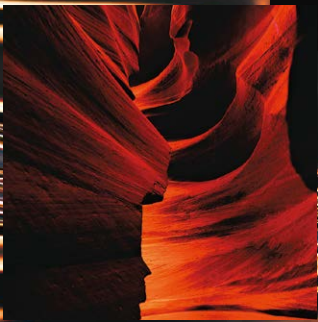




Kyosuke Baba
WORKS



Advertising
Photographs



Art



Movie



INTERVIEW

[インタビュー]

魅力的な写真、映像を数多く生み出し、現在では舞台演出なども手掛ける馬場さん。
写真から始まった馬場さんにとっての映像制作とは。



PROFILE

馬場 鏡丞

Kyosuke Baba

20歳から広告写真スタジオで写真を始め、25歳で独立。バレエ舞台を撮影した写真がパリのHERMES本店で展示され、パリオペラ座エトワールの肖像権使用を許可された数少ないフォトグラファーとなる。札幌を中心に東京や世界各国で活動を展開。企業広告写真やTVCM、PVなどの制作を行っている。その演出が認められ式典プロデューサーやプロジェクトマネージング、空間インスタレーション、バレエ舞台や演劇の脚本演出も手掛けている。今年、写真、映像、食べ物を軸にさまざまなものを制作演出するチーム、(株)IAMを設立。また作家活動も盛んに行っており、3・11の震災以降はエネルギーをモチーフに視覚化する写真作品に取り組んでいる。

人々が持つ想像力を信じ 空想の触媒になりたい

— 写真を専門にしていた馬場さんが映像を始めたきっかけは

元々は写真スタジオに入ってひたすら広告写真を撮っていました。その後独立して広告から離れ、全く違う分野の写真を色々撮っていたのですが、とあるきっかけで、海外のファッション業界の写真を撮ることになりました。そういった様々な経験を経て北海道では、ポスター等の、メインビジュアルをメインワークとして、改めて広告写真撮影し始めました。

仕事によってはポスターだけでなくCMなど他のメディアも作られるのですが、当時はそれぞれ別のディレクターが作る時代だったので世界観が全然違うものができるんです。それはおかしいなと思って写真だけではなく、映像も、そして企画自体もやるようになったのがきっかけですね。

— 映像を作る上で気をつけていることはありますか

自分の場合は写真でやってきたことが土台にあります。広告写真を撮る上では、見る人を1秒でもポスターの前に立ち止まらせることが使命だと考えています。それには写真1枚の中にある程

度世界観が必要なんです。写真はよく「一瞬を切り取ったもの」と言われますが、自分は写真を見た人の頭の中で写真が動けばいいと思って、前後の時間が想像できるような写真を撮ろうと心がけていました。映像は、その写真の前後の時間を作り出している感じなんです。

今の世の中は情報過多なものが多い気がします。「情報量の多いもの」と「インパクトの強いもの」は反比例していて、情報量が増えるとそれを理解するのに一生懸命になってしまい印象には残りません。不特定多数向けならそれで良いのかもしれませんが、ファンになって欲しいなら、見る人の想像力を信用し、伝えるべき事象に備わっている世界観や雰囲気を映し出すことのほうが重要だと思って作っています。

— 写真と映像の表現は違いますか

よく聞かれるんですけど、全ての表現は「言語」だと思うんです。フランス人が目の前にいたら下手でも「ボンジュール」くらい言いますよね。アメリカ人なら英語で、といったように相手に伝えるために沢山ある言語の中から適したものを選んで使います。それと同じで、どの表現も全ての人に伝わる万能なものはなく、あくまで伝え

るための1つの言語でしかないんです。そう考えると、例えば英語が上手く喋れるかどうかよりも、喋る内容が一番重要ですよ。上手く喋れなくても、伝えたいことが明確なら翻訳家をお願いして伝えてもらってもいいんです。映像も同様に表現したい中身が重要であって、それを考えるのが自分たちの仕事だと思っています。「伝えたい言葉」の中身を自分たちが担い、必要に応じて周りの優秀な翻訳家たち、つまりスタッフに伝達する作業をするんです。写真も映像も共同作業においては変わりありません。「言語」が違います。

— スタッフとのコミュニケーションで心がけていることはありますか

そこは自分のものづくりの核になる部分です。以前は自分の意思を完全に伝達しようと努力していましたが、結局は他人なので完全な一致にはなりません。むしろ相手を許容し、ズレを楽しむことが重要だと気づいたんです。1つの物事に対して他の人がどんな想像をするのか、一緒にイメージを膨らませ、その上で共通部分とズレる部分を楽しむ。ズレていても、あえてそのまま任せたりすることで思いがけない面白さが生まれるんです。

ズレを感じられることはとても重要だと思っていて、それは撮影現場でも同様です。スタッフに1つだけ役割を与えると、それに囚われてしまうので、スタッフには必ず役割を複数与え、他のスタッフとも協力する必要があるようにしています。そうすることで、他の立場の人々のことを

考えるようになるのです。その中で他の人がどう考え、何をしようとしているかを感じられることで、初めて自分はどう動くのが良いか考えることができるんだと思います。映像制作は、結局のところコミュニケーションが最も重要かもしれないですね。

— 今後やってみたいことはありますか

とても難しい質問ですね。これまでずっと「自分は何者なんだろう」と得意なことを探していて、その結果こうなってしまったという感覚がすごく強いです。しいて言えば、北海道にいながら世界の仕事をしたいという思いはあって、それが最近叶い始めたので、それは嬉しいですね。

Process

石山緑地新能PVができるまでのプロセス

Meeting

聞き取り

映像を作る上で依頼者の要望はとても大事。何をどう見せたいのか。依頼者の思いをしっかりと聞き取ることで初めてどのような映像を作るか考え始めることができます。



Video shooting

撮影

スタッフ、キャストなど多くの人が関係者として関わる撮影現場。現場の状況次第では長時間に渡ることも。そんな時のために関係者へのケアも想定して現場を構築していきます。



Video editing

映像編集

撮影された素材をもとに編集を加えていきます。想定していたカットに加え、撮影現場で取れた予定外の素晴らしい映像なども加味して1つの作品へと仕上げていきます。

Pick up

ピックアップ

石山緑地新能『あたら夜の月影 一覧古考新』プロモーション映像

馬場さんと教文が初めて手を組んだ映像作品が石山緑地新能『あたら夜の月影 一覧古考新』のプロモーション映像。夜の闇のなか、篝火に照らされ石山緑地に佇む老婆が鬼女へと変貌していく様子が映る映像には、普段見かけるCMなどと違いナレーションは一切なく、イベント情報さえ最低限しか表示されません。だからこそ、日常とは全く異なる空気感がダイレクトに伝わり、何が起るのかと気になってしまう映像となっていて、新能への期待が増すものになっています。



スマホからはこちら

TVCMのために撮り下ろした作品ですが映画を撮影する心持ちで企画しました。いかに、石山緑地の夜の空気を映し込むかに注力いたしました。ぜひご覧ください。



<https://www.kyobun.org/takiginoh/>

